

あさひ View

1・2

2011 January & February

特集

和歌にあそぶ



○大学病院研究室めぐり—— p6

兵庫医科大学救急・災害医学講座
兵庫医科大学病院救命救急センター

○薬剤科訪問 —— p11

東京都立多摩総合医療センター 薬剤科

○病診連携 —— p13

宮崎県立日南病院 医療管理部医療連携科

○学会クローズアップ—— p5

○フォーラム—— p9

チーム医療

○素朴なごちそう —— p14

れんこん

○Let's Try! 頭のストレッチ—— p15

旭化成ファーマ株式会社



兵庫医科大学救急・災害医学講座 兵庫医科大学病院救命救急センター



研究マインドに支えられた チーム医療が、 高度な救命救急を可能にする

兵庫県東部8市1町を医療圏とする兵庫医科大学病院救命救急センターには、全身熱傷、指肢切断、複合疾患など、ありとあらゆる患者が昼夜を分かたず運び込まれてくる。迎えるのは、ひときわ目を引く藍色のユニフォームに身を包んだ精鋭部隊。一刻を争う患者の容態から情報を読み取り、全神経を集中して治療にあたる。迅速かつ的確な判断と精確な手技で命をつなぎ止める。その底流にあるのは、研究マインドを重視した教育体制と徹底したチーム医療である。

小谷穰治	主任教授
久保山一敏	講師
大家宗彦	講師
宮脇淳志	学内講師
上田敬博	助教
寺嶋真理子	助教
尾迫貴章	助教
小濱圭祐	助教
橋本篤徳	助教
山田太平	病院助手
河合光徳	病院助手
井上朋子	レジデント
布施知佐香	レジデント
丸川征四郎	非常勤医師
吉永和正	非常勤医師
山内順子	非常勤医師
伊藤眞紀	非常勤医師
藤原由規	非常勤医師
井上貴至	非常勤医師
足立 克	非常勤医師
木下理恵	非常勤医師

- 同門会会員数 55人
- 対応件数(2009年)
2,091件
- 3次救急入院患者数(2009年)846人
- 手術件数(2009年)244件
- 病床数 30床
- 関連施設
 - 明和病院 外科
 - 明和病院 ER
 - 兵庫県立砂子療養センター
 - 阪和記念病院
 - 東神戸病院
 - 西宮浜協和マリナホスピタル
 - 大隈病院
 - 川西協立病院
 - さそう病院
 - 田中病院
 - 八杉クリニック
 - 岩津外科胃腸科外科クリニック
 - 太田外科
 - 小中島診療所
 - 聖和病院
 - 奥医院
 - 吉本クリニック (順不同)

兵庫医大救命救急センターがカバーするのは西宮、尼崎、伊丹、宝塚、川西、三田、丹波、篠山の各市と猪名川町の広範な地域。重症複合疾患など、緊急治療が必要な患者を年間約1000例受け入れている。ちなみにユニフォームは人気TVドラマ「コード・ブルー」と同じものだ



力して全身性炎症症候群の制御を目的にした新しい栄養剤などの開発を行うなど、産学共同研究にも力が入る。「医者は科学者であるべきで、科学的なものの考え方を身に付けるためには、一度はサイエンスの世界に浸ること、すなわち研究を行うことが重要です。研究マインドがなければ物事の真実を追究する力は養われない」というのが小谷教授の哲学でもある。

小谷教授自身、免疫抑制の一因である骨髄細胞減少が骨髄幼稚好中球の大量APO誘導であることを見出した「侵襲下における好中球(PMN)のアポトーシス(ApO)誘導・抑制」の研究で、アメリカ外科感染症学会の学会賞をアメリカ人以外の外国人で初めて受賞した。この研究者マインドを受け継いでもら



カンファレンスは医局員の連携を強化するうえでも欠かせない。毎日午前8時から行われる症例カンファレンスには医師だけでなく、看護師も参加する。また、週1回開かれる医局会は、小谷教授が医局員一人ひとりの研究や論文の進捗状況を確認する機会にもなっている

西宮市の東端、尼崎市との市境に位置する兵庫医科大学病院は1972年に開設された特定機能病院で、1996年には災害拠点病院に指定されている。その中核である救命救急センターは1980年に設置され、2009年に小谷稔治主任教授が先代の丸川征四郎教授から救急・災害医学講座を受け継いだ。独立したICUと一般病棟(計30床)を備えた同センターは、現在、面積1500²km²に及ぶ人口184万人の兵庫県東部エリアの3次救急を一手に引き受けている。2009年の搬入依頼件数(電話相談含む)は2091件で、10年前の約3倍にも上っている。同センターの特徴のひとつは、受け入れ先のない複合疾患の重症例でも対応が可能なことだ。「産婦人科、眼科、耳鼻科、脳・呼吸器・循環器・形成などの各外科の緊急手術も24時間対応できることが大学病院としての強みです」と小谷教授は話す。

救急医療の成否を決める チームワークの強化をめざして

同センターのスタッフは、小谷教授ほか12名。来年度は中堅2名、レジデント3名の入局が決まっている。それぞれ救急および集中治療に加えて、外科、整形外科、消化器外科、消化器内視鏡、循環器内科、脳外科、小児科などの専門領域をもっている。これらの専門領域を救命救急医療に活かすためにも、

チームワークの強化は不可欠だ。

定期的に行われるミーティングは医局員が結束する上で重要な役割を果たす。毎朝行われる症例カンファレンスには、医師だけでなく看護師も参加し、搬入された患者の状態を確認しながら、その日の治療方針を決める。毎週月曜日にはそこに法医学の医師も加わる。また、週1回開かれる医局会では、治療方針、人事などについて話し合いがもたれる。理学療法士、言語療法士、ケースワーカーなどを交えたりハビリカンファレンスも定期的に行うなど、チームとしての体制づくりに余念がない。

さらに、災害拠点病院でもある同センターでは、災害医療チーム(DMAT)2隊が大規模災害に備え日常的に訓練を行っている。2005年に起きたJR福知山線列車脱線事故では、わが国大都市での大災害で初めて現場と病院でトリアージを行い、113名もの被害者を受け入れた。日頃の訓練が実を結び、ほぼ完璧な対応ができたという。

地域のネットワーク強化も重要な課題である。いま、救急医療が抱える大きな問題は人手不足だ。同センターも例外ではなく、この陣容で一人当たり月6、7回の当直をこなさなければならぬ。勤務時間が終わっても24時間オンコールの臨戦態勢の緊張は解けない。

そのため、急性期を切り抜けた患者を受け入れてくれる後方病院探しも救命救急医の重要な仕事だ。患者を移動させなければベッドが空かず、新たな患者を受け入れることができない。とりわけ3次救急病院はその回転が速く、空きベッドを探して一日中電話をかけ

いたいと、医局員には日頃から学位取得をめざした研究活動を熱心に勧めているという。

ジェネラル・フィジシャン&サージヤンの スペシャリストを国内外で育てる

小谷教授がめざす救急医療、地域医療は、1次、2次、3次医療を明確に棲み分け、臨機応変に連携できるシステムだ。そして3次救急を担う病院では、ジェネラル・フィジシャン&サージヤンとして重症疾患の初期治療にあたることも、専門性も兼ね備えた医師の養成が必要だという。

「初期治療に関してスーパー・ジェネラル・フィジシャンとして全身の重症の疾患に対応できるような医師にならなければなりません。しかしそれだけでは不十分です。初期治療のスペシャリストになっただけでは、そこから先

ることもしばしばだという。「受け入れ先の病院長や救急担当者に直接交渉するのが手取り早く、日頃から勉強会を開いたり、一献傾ける機会を設けて意思疎通を図っています。これも大事な仕事です」と小谷教授は語る。

「医者は科学者であり、 研究を重視するべき」

大学病院は研究、教育の場でもある。当講座では救急医学、災害医学の2つの柱で研究を推進している。救急医学医療領域の研究では、外傷や疾病による過大な侵襲と二次性の臓器障害について、その生体反応のメカニズムと新しい治療法の開発を中心に展開している。また災害医学医療領域の研究では、救急現場(病院前救護)をモデルとして、災害現場と後方医療施設との高品質な情報通信システムの開発を進めている。

救急医学医療領域の基礎研究のひとつ「短鎖脂肪酸やn-3系多価不飽和脂肪酸(魚油)など特殊栄養素による免疫担当細胞のアポトーシス制御とその臨床応用」の研究が進行中だという。また、企業と協



基礎研究のひとつ「短鎖脂肪酸やn-3系多価不飽和脂肪酸(魚油)など特殊栄養素による免疫担当細胞のアポトーシス制御とその臨床応用」のシェーマ。研究の成果を臨床に活かすことも教室の重要な使命だ。小谷教授を含め3人の医師がTNT(Total Nutrition Therapy)の資格をもち、患者の代謝・栄養管理にあたっている

Message From Professor

阪神淡路大震災が救命救急医を志す大きな契機になりました。当時、神戸大学大学院に在り、被災現場を目の当たりにしました。もともと消化器外科医としてスタートしましたが、災害医療の必要性を痛感。帝京大学の救命救急センターで外傷外科を学びましたが、手術が成功しても臓器障害で亡くなる患者さんが少なくない事実と直面し、「免疫」に興味をもつようになりました。それが高じてアメリカに留学。現在、自分が理想とする臨床・研究・教育の場が実現しつつあります。またカンボジアでの医療構築活動は医師として壮大なロマンを感じます。



小谷稔治 教授

- 1987年 山口大学医学部卒業
- 神戸大学第一外科入局
- 1988年 加古川市民病院外科(医員)
- 1989年 神戸海岸病院外科(医員)
- 1990年 帝京大学病院救命救急センター助手
- 1991年 神戸大学第一外科(医員、研究生)
- 1993年 神戸大学大学院 医学系研究科外科学系入学
- 1997年 神戸大学大学院 医学系研究科外科学系修了
- 米国ニュージャージー州立医科大学、ロバート・ウッド・ジョンソン医科大学外科留学
- 2000年 神戸労災病院外科医長
- 2002年 兵庫医科大学救命救急センター助手
- 2003年 兵庫医科大学救命救急センター学内講師
- 2006年 兵庫医科大学 NSTディレクター(兼任)
- 2007年 兵庫医科大学救命救急センター准教授
- 2009年 兵庫医科大学救急・災害医学講座主任教授、同救命救急センターセンター長

現在、日本救急医学会、日本腹部救急医学会、近畿外科学会、日本外科代謝栄養学会、日本静脈経腸栄養学会、ほかの評議員を務める。